【二つの東照宮・久能山と日光】

江戸時代、神君家康を祭祀した「東照宮」は全国に三百数十余社あったという。将軍家に忠誠を示すために諸大名が競って「東照宮」を勧請したためである。全国東照宮連合会発行の『徳川家康公』によれば、今日でも百五社の東照宮が現存している。これら東照宮の中で、最初に建立されたのが、元和二年の久能山東照宮で、もっとも新しいのが明治九年八月の牧之原東照宮である。久能山東照宮は、元和二年四月十七日駿府城に於いて没した家康の遺言によるものであり、牧之原東照宮は幕府倒壊後、静岡へ移住し、牧之原開墾に従事した徳川家臣団(中條景昭ら)が建てた社である。

●東照宮は何故、久能山から日光へ移されたのか?

家康は七十五歳の生涯を駿府城で閉じた。元和二年(1616)四月十七日のことである。死因は胃がんであったという。死期を悟った家康は、本多正純、金地院崇伝、南光坊天海の三人に対し、

「我死して後、遺骸は久能山に納め、神道によって祭祀せよ。葬儀は江戸の増上寺で行い、位牌は三河の大樹寺に立てよ。一周忌の後は日光に小廟を建てて勧請するがよい」さらに「遺体は西に向けよ。西国の鎮めとならん」と遺言した。神道というのは、吉田神道(唯一神道)のことで、神龍院梵舜が司り、これは崇伝の推奨によるものであった。増上寺の観智国師(存応)、松平家菩提寺の大樹寺、天海が支配する日光山と、すべてに気配りの行き届いた遺言であった。

四月十七日、家康が死去すると、その夜のうちに遺骸は侍臣榊原照久を斎主として神道の式によって久能山に納められ、十八、十九日の両日にわたって盛大な祭祀が営まれた。つづいて〃神殿建立〃のことになり、将軍秀忠は唯一神道にのっとって「社殿は大明神造りにせよ」と、大工頭中井大和守政清に命じて社殿の造営に着手させた。総奉行は駿河国主徳川頼将(のちの頼宣)であった。

ところが、この遺言に異議を申し立てたのが天海である。天海は「大御所(家康)様は、唯一神道で祭祀されるのは本意ではなく、わが天台宗に伝わる山王一実神道で祭祀されたいというのが、本当の遺言である」と言ったのである。

これには遺言を一緒に聞いた正純、崇伝が驚いた。秀忠はその真相を糺そうと駿府城内で二人と天海を対決させた。席上、正純は天海の襟首をつかみ、「南光坊の勝手なふるまい許しがたい。遠島にすべきである」と怒った。しかし、この時点で、正純、崇伝は天海の術中に陥っていた。秀忠が天海の異議を採り上げたのは、なにも家康の遺言の正否ではない。そこに正純、崇伝が気づかなかったのは迂闊であった。この時点から神号問題とからんで天海のひとり舞台が始まるのである。

●天海の手品のタネとは？

徳富蘇峰の『近世日本国民史・統制編』には「生ける家康は、随意に崇伝、天海、存応の徒を駆使した。然るも死せる家康は却って天海の為に、その手品の種となった」とある。

秀忠が天海の言を採り上げた理由には二つあった。一つは駿府の大御所政治の残影を払拭し、江戸将軍政治への一元化である。家康の生存中、秀忠は何事も駿府の指図を仰がなくてはならなかった。その駿府で側近として権勢を振るっていたのが本多正純である。家康没後の正純は幕府の閣僚に加わることになっていたが、秀忠は内心快く思っていない。秀忠には土井利勝、酒井忠世らのブレーンがおり、正純はむしろ排斥したい存在だった。政治嗅覚の鋭い天海は、この辺りの情勢を読み取り、新実力者土井利勝に運動したのであろう。（江戸には正純の父本多正信がいたが、家康没後二ヶ月後に死去した）

二つには、駿府城主徳川頼宣の存在がある。頼宣は家康の十男で、当時十五歳であったが、晩年の家康が手元において訓育したほどだから、幼少から英邁の誉れ高く、すこぶる出来のよい男である。東海道の要衝を治め、徳川家の精神的象徴となる久能山の霊廟をひかえている。しかも家康廟の造営は頼宣であり、以降、祭祀とその守護にあたることになっている。

秀忠にとっては、ずいぶん歳の離れた弟だが、秀忠の嫡男家光とはわずか二歳しか違わない。ちなみにこの時、尾張の義直は十七歳、水戸の頼房は十四歳。家光は十三歳、忠長は十一歳である。つまり、三代将軍となる家光の周囲には三、四歳しか違わない叔父さんたちと二つ年下の弟がいるのだ。秀忠にすれば、兄の結城秀康、弟松平忠輝などの兄弟問題で手を焼いている。将来のことを考えると、諸大名に評判のよい頼宣は不気味な存在であった。

この二つの理由は、以後の歴史が証明している。本多正純は幕閣に列し、宇都宮十五万石の大名となったが、巷説にいう〃宇都宮つり天井事件〃で失脚、出羽国由利に流され、憤死した。（この事件は正純が改易となった最上山形城の受取り役に出掛けた先で、取り潰しの通告を受けている。まったく些細な理由で明らかに謀略であった）。頼宣は三年後の元和五年、駿府から紀州和歌山へ移封。石高の五十五万石は同じだが、東海道の要衝から南海の僻地へと追いやられている。頼宣は〃南龍公〃と呼ばれ、傑物であったが、家光死後に起きた由比正雪の慶安事件では、その関係を疑われ、江戸に十年間も留め置かれて監視されている。

●神号問題、〃大明神〃か、〃大権現〃か？

かくして天海は秀忠に、自ら創作した家康の遺言を認めさせた。だから、江戸城で行われた神号問題の論争も形式だけにすぎなかった。崇伝の意向を代弁する神龍院梵舜が「大明神」（唯一神道）、天海が「大権現」（両部神道）をそれぞれ主張し、「大明神」は秀吉を祭祀した豊国大明神と同じで不吉であると斥けられたが、これには秀忠、利勝、天海の間に合意があったと考えてよい。それはつまり、頼宣、正純、崇伝の封じ込め策であった。それをいち早く看破した崇伝は、「今はだれもかれも大炊殿（土井利勝）へ頼み入る体と相見え申し候」(『本光国師日記』)と、親交のある肥後の細川忠興に手紙を書き、以後、この問題に崇伝は固く口を閉ざしてしまう。

家康祭祀の主導権を握った天海は、元和二年六月、上洛して〃大権現〃の神号の勅許を奏請した。しかし、天台宗には山王神道はあっても、〃山王一実神道〃など聞いたことがなく、朝廷は四ヶ月も苦慮したあげく、東光大権現、日本大権現、東照大権現、威霊大権現の四つの神号を選定し、その選択は将軍に一任することにした。

神号は「東照大権現」に決定した。これは天海が家康の遺言を「一周忌の後、日光へ改葬せよ。われ関八州の鎮めとならん」とデッチあげた主旨に叶った神号であった。十一月に入ると天海は日光の地に社殿の建築を開始する。それにしても家康は生前、日光へは一度も足を踏み入れたことはない。一周忌にそんな所へ改葬されようとは、さぞや驚いたことだろう。

●家康の遺骸は本当に日光へ移されたのか？

元和の日光東照宮はわずか五ヶ月ほどで落成した。総奉行は本多正純、縄張りは藤堂高虎、大工頭は中井大和守正清。造営は元和三年四月の一周忌に合せて急ピッチで進められた。この時の建物は、本社、本地堂、回廊、御供所、御厩などで、後世の豪壮華麗な社殿ではなく、ごく小規模で装飾も和様で地味なものであった。今日、群馬県尾島町にある長楽寺の世良田東照宮の拝殿がそれであるといわれている。『仮名縁起』の「元和御造営御宮の図」に描かれた拝殿は五間×三間で、世良田東照宮の拝殿と同じであり、奥宮の家康廟も白木の塔であった。

元和三年三月中旬、家康の遺骸を改葬すべく、天海、本多正純、土井利勝らは久能山に登った。この時、天海は自ら鋤鍬をとって:下知したというから、さぞ得意満面だったろう。だが、この日天海はじつに謎めいた和歌を詠んだ。

「あればあれ　なきをはなきにするかなる　くのうの神の宮うつしかな」

というもので、解釈の仕方でずいぶん謎めいてくる。つまり「なきをはなきにするかなる」は、亡きと無き、するかと駿河のかけ言葉だから、家康の遺骸が

あろうと無かろうと、久能山から日光山への遷宮には一向さしつかえがないのだ、とする天海の自信を示したものと受け取れる。

家康の遺骸は埋葬されて一年経っている。記録を調べても特殊な加工をされたようすがないから、かなり腐乱していたに相違ない。だから、遺骸の移送は断念せざるを得なかったのだろう。『徳川実記』には「久能の宮の奥で深秘の事を取り計らった」とある。この「深秘の事」について、日光東照宮宮司の額賀大興氏によれば、「遺体を具体的にどうしたのかではなくて、宗教的に申せば、御神霊をお移し申し上げる」ということで、移したとすれば遺髪か爪くらいだろうと、『日光東照宮』（昭和 56 年・中央公論社刊）で述べている。

結論をいえば、家康の遺骸は久能山から動かさず、東照大権現の御神霊だけを日光山へ移したのである。

●霊柩を日光山へ斂葬（れんそう）する

元和三年三月十五日、金輿に納めた霊柩の行列は、天海、土井利勝、本多正純ら千三百人によって、久能山を出発した。一行の様子は、行列に供奉した烏丸光広の『東照権現御遷座之記』に詳しい。この中で、一行はなぜか江戸へ向わず、武蔵中原から府中をぬけて川越の喜多院に入った。そして、ここで四日間も留まって、大法要を営む。この法要は、その後の喜多院の特権的な地位を築いていく、大きな要因となった。天海は先の先まで読んでいたのである。

こうして四月八日、霊柩は造営なった日光東照宮の奥院に埋葬され、ついで十四日、御神霊を仮殿に移し、宣命使の中御門宣衝卿によって〃東照大権現〃の神号が捧げられた。十七日、正遷宮の儀式が行われ、天海は、
「東より照らさん代々の日の光り　山を動かぬ例しにはして」と詠み、一同は万歳を三唱したという。まさに天海が家康の遺骸を「手品」のタネのごとく、思いのままに操る、得意のありさまが目に浮かぶようである。

しかし、天海のいわば強引とも思われる行動を、秀忠はあまり快くは思っていなかったようだ。天海が日光東照宮の大造替を言い始めるのは、盲目的に祖父家康を崇敬して止まない三代将軍家光になってからである。ちなみに家光はその生涯で、日光東照宮の参詣は十回を数えたが、増上寺にある父親の秀忠廟には二回しか詣でず、母親の崇源院廟には一回も詣でなかった。

●久能山東照宮の家康画像の不思議？

久能山東照宮にある家康画像には、山門三院執行探題・大僧正天海の賛文が書かれていて、それにはこうある。

「　東照大権現
　　我滅度後　於末法中　現大明神　広度衆生　」

直訳すれば、「東照大権現は、我滅して後に、末法の世になったならば、大明神となって現われて、広く人々を救うであろう」という意味であろう。不思議なのは、「大明神となって現われる」と天海が書いている点だ。家康の神号問題では、崇伝の主張する「大明神」を真っ向から否定し、山王一実神道を持ち出して「大権現」に決定させた張本人の天海が、「家康は大明神となって現われ、人々を救ってくれる」というのだから、これは一体どうしたことなのか。天海の真筆は確かである。書いた年号は分からないが、天海は寛永二十年（1643）に亡くなったから、それ以前である。やはり久能山東照宮だけは、天海といえども「大明神」と認めざるを得なかったらしい。

●謎にみちた天海の経歴

慈眼大師こと天海の前半生は不明である。寛永二十年に没したが、享年百三十四といい、また百八歳ともいう。出自も奥羽の芦名氏といい、足利将軍義澄の落胤とか、どれもこれも信憑性に乏しい。かれの語るところによれば、幼年期は会津高田稲荷堂の舜海法印の下で学問し、のちに比叡山に入って修行。元亀二年、信長の焼き討ちを逃れて、武田信玄の下に走り、手厚い保護を得たという。その後、世良田の長楽寺をへて川越の喜多院に入ったが、一時乞われて下野国の宗光寺の住職となった。

天海が家康の命を受けて、叡山の山門復興に活躍するのは慶長十四年（1609）からで、この時、権僧正を許され、延暦寺で催される法華大会の探題役を勤めた。「山門執行探題」はこの大会の論議の判定をする最高の権威者である。併せて南光坊と改めている。家康は慶長十六、十七年の二度にわたって川越の喜多院に立ち寄り、寺領三百石を与え、比叡山の天台勢力を関東の地、すなわち喜多院に吸収させようと図った。これは朝廷の比叡山支配を断ち切り、幕府の監視下に置くことを意図したものであった。この為、喜多院では「星野山」の山号を「東叡山」と改めたが、寛永二年、上野に天海が開山となって東叡山寛永寺が完成すると、喜多院は元の「星野山」に戻した。こうして、天海は幕府の政策に乗じて、天台の全国的支配の総本山を手に入れたのである。寛永寺はその意味で喜多院を発展させたものといえるだろう。

●日光東照宮の大造替

久能山東照宮は一年七ヶ月を要して完成した。屋根は檜皮葺(のち銅瓦葺)ながら、外観は壮麗。細部にわたり彫刻・絵画・色彩金箔を施し、本殿の左右･背面は黒漆で仕上げ、その華麗さは目を奪った。にわか造りの元和の日光東照宮とは比べものにならない。東照宮は御三家の尾張、紀伊、水戸にも勧請され、続いて上野寛永寺、南禅寺金地院、仙波喜多院、坂本日吉にもそれぞれ豪壮・華

麗な社殿が造営された。天海にすれば、自分が支配する日光東照宮が元和創建の社殿では見劣りがしてならない。そこで大造替をしたいが、まだ秀忠や崇伝が健在であり、「日光に小廟を建てよ」という家康の遺言は無視することはできない。しかし、寛永九年秀忠が没し、翌十年には金地院崇伝も亡くなると、もはや、家康の遺言や当時の真相を知る者がいなくなった。

三代家光は自分を将軍にしてくれた祖父家康を崇敬すること甚だしく、秀忠生存中は小さな御宮を自室内に飾り、隠れるようにお参りしていたと『智楽院忠通書上』に出ている。そんな家光の性格を見抜いて、天海は日光東照宮の大造替を勧めたのである。家光は当然のこと、幕府首脳も徳川政権の力強さを天下に知らしめす一大事業を行う必要があった。かくして寛永大造替は、天海、家光、幕府首脳のそれぞれの思惑が一致したことから興されたのである。

寛永十一年十一月、造替に着手し、同十三年四月に完成という超スピードの工事だった。普請奉行は秋元但馬守泰朝、大工頭は甲良豊後守宗広。総費用は五十六万八千両、銀百貫目、米一千石を要した。動員した彫物大工、平大工、木引の延べ人数は七十七万九千八百六十三人におよんだ。家光は一切の費用を幕府の御金蔵から出し、諸大名には一銭も出させず、寄付も許さなかった。一説に費用の金は駿府御遺金(家康の遺産)だったという。

●日光東照宮の社殿の謎?

天海の宿願であった日光東照宮は完成した。これが今日〃世界遺産〃に登録された絢爛豪華な一連の建築物である。大工頭の甲良豊後守宗広は、法隆寺大工の系統の中井大和守正清とは異なり、唐様を主体とする建仁寺流であった。これは久能山東照宮を、崇伝とつながりのあった中井が和様造りで建築したので、天海が嫌ったからである。天海は山王一実神道による祭祀には、どうしても自分の息のかかった甲良豊後に担当させなければならなかった。では、天海が日光東照宮大造替に秘かに意図したものはいったい何であったのか。

日光東照宮の社殿を注意深く見学された人ならば、奇妙なことに気づかれるだろう。それは本殿の背後に扉と后拝(こうはい)、それに階(きざはし)が付いていることである。どんな神社にいっても、本殿の背後に扉がある神社などは、まず見ることがない。同じ東照宮でも、久能山、上野、和歌山、世良田、川越、日吉(坂本)、滝山などの東照宮本殿の背後には扉や后拝は一切見られない。神社の本殿は云うまでもなく、神が鎮座する場所であり、拝殿はそれを拝む所である。拝殿と本殿は東照宮の場合は〃石の間〃で隔てられているが、この隔絶は厳格なもので、例え将軍であろうと本殿内には立ち入ることはできない。

神君・東照大権現(家康)が鎮座する、その本殿の背後に扉があるということは、これは本殿に神君がいないということになるのではないのか。つまり、本殿が

筒抜けの格好になってしまう様式である。
　それでは拝殿において何に向って拝んでいるのか。略図をごらん願いたい。本殿の背後の延長線上に何があるのか。そう、家康の廟所、つまりお墓に向って拝んでいることになるわけである。また、本殿の裏側の端垣(透塀・元禄時代までは回廊があった)には北唐門があり、奥宮の廟所の前には拝殿もある。これらはすべて南向きにほぼ一直線上に並んでおり、まことに不思議な社殿の配置といえる。
　久能山東照宮と比較するとよく分かる。本殿は地形上やや南西に向って建てられているが、廟所は明らかに西を向いており、本殿とは一直線上の位置にない。本殿の背後の扉もなければ后拝もない。吉田神道(唯一神道)では、神を本地とするので、墓所を拝礼するなど忌み嫌うところから、当然の建築上の配置であった。久能山東照宮はまったく「大明神造」にふさわしい伝統的な神社的要素の強い社殿形式であった。
　日光東照宮では山王一実神道による仏教色の強い社殿形式が必要であり、社殿と墓所の関係は密接にしなければ意味がない。拝殿・本殿・北唐門・廟所を正中線上に並べで参拝の形式をとり、家康の神号「東照大権現」の本地である薬師如来の本地堂を建て、経堂等を配置している。
　本殿は正面五間、側面五間であるが、その内、前面の側面二間を幣殿とし、後部の側面三間を内陣、内々陣に分けている。この内陣、内々陣の平面は、柱間三間の本殿の前面と側面二間に庇を付加した日吉神社本殿の平面とまったく同一であるという。(城戸久講演録『日光東照宮はなぜ作られたか』)。この本殿の平面こそ、山王一実神道に基づくものであって、前面の幣殿は仏堂の礼堂に相当することになり、それは総体として、天台仏堂の平面と同様になるのだという。したがって寛永大造替の東照宮本殿は、日吉神社本殿と天台仏堂を総合して造られたもので、これこそ山王一実神道の社殿形式であって、まさに「権現造」という名にふさわしいという。

　なお、「権現」の元来の意義は、仏教に於いて仏や菩薩が衆生済度の方便として、権(かり)に種々の身形を現すということだが、わが国では本地垂迹説によって、この権現の思想をわが国在来の諸神に結びつけ、特殊の神号として発達したものである。例えば、伊豆山権現、箱根権現、蔵王権現、金比羅大権現がある。日光東照宮の本地堂には、薬師如来が祀られている。当然、唯一神道の久能山東照宮にはなかったが、のち本地堂が造られ、明治の廃仏毀釈で撤廃されている。